

薬を早く飲めば治る？ 誤解の多い「認知症」を 正しく知る



認知症治療は、脳の機能と生活の質をできるだけ維持することが目的。薬物治療が有効なこともありますが、過度の期待は禁物で、薬以外にも目を向けることが大切です。



神経科 部長
古川 俊一

【専門領域】
精神科リハビリテーション／個人精神療法／リエゾン精神医学

【主な資格】
精神保健指定医／日本臨床心理士資格認定協会・臨床心理士／日本精神神経学会・精神科専門医／日本総合病院精神医学会・一般病院連携精神科専門医／日本医師会 産業医

【期待が大きい抗認知症薬による治療開始時期は慎重に判断を】

認知症は早期発見が重要？

認知症には、脳に異常タンパクが蓄積して脳が萎縮する「アルツハイマー型認知症」、幻視や歩行障害を伴う「レビー小体型認知症」、脳卒中などの病気によって発症する「脳血管性認知症」などさまざまな種類があります。その中には、脳脊髄液が脳を圧迫して起こる「正常圧水頭症」のように、治療すれば治る認知症も存在します。治る認知症を見逃さないよう、早めに受診するのはいいことです。

しかし、「早期発見して薬を飲めば認知症は治る」というのは、必ずしも正しくありません。残念ながら今のところ、脳の萎縮を止めたり、もの忘れを治せる薬は存在しません。

認知症の薬について教えてください

抗認知症薬は現在4種類あり、アルツハイマー型認知症とレビー小体型認知症に用いられています。薬には弱っている脳の働きを一時的によくしたり、脳細胞を保護する働きがあります。ただし、誰にでも目に見えて効果があるわけ

ではありません。

患者さんのご家族から「薬を飲んでいのに変化がない」といわれることは少なくありません。しかし、放置すれば脳の機能は徐々に低下していくので、変化がないということは、薬が効いている可能性があります。服用をやめると認知症の症状が悪化してしまい、「やっぱり薬は効果があったんだ」と納得されることも多いです。

薬は早い段階で飲み始めた方がいいのですか？

「使い始めるのが早ければ早いほど薬の効果が出やすい」とも一概にはいえません。薬は永続的に効くわけではなく、不整脈、吐き気、イライラ、怒りっぽくなるなどの副作用が出ることもあります。薬には必ずメリットとデメリットがあります。デメリットのほうが大きい軽度の段階で副作用を我慢して、生活の質を落としてまで服薬するのかについては、慎重に判断すべきです。

【治療は薬物療法だけではなく、飲んでいる薬と生活の見直しも重要】

病院を受診したのに、薬が処方されない場合も

たとえ抗認知症薬を使っても、毎日ずっとテレビの前に座ったままの生活では、やはり脳の機能は低下してしまいがちです。薬を試す前に、生活習慣の見直しなどいくつかやるべきことがあります。

やるべきことの一つに、現在飲んでいる薬の見直しがあります。高齢者は糖尿病や高血圧、高脂血症といった何らかの薬を複数処方されていることが多く、そこへさらに抗認知症薬を足してしまうと、副作用などのトラブルの可能性が高まります。また、睡眠薬や抗不安薬を常用している人は、薬をやめるだけで、認知症の症状が改善することもあります。医師とよく相談してください。

薬は、飲んだり飲まなかったりでは効果が期待できませんから、一人暮らしなどで薬の管理が難しい患者さんには処方しないこともあります。老人ホームなどに入居し、きちんと薬を飲めるようになると、症状が安定する人もいます。

生活習慣の改善で本当によくなりますか？

運動、血圧や血糖値の管理、食事を工夫することが認知症への進行を抑えることがわかっています。「努力は報われる」というのが、最近の認知症治療や予防の考え方です。

【介護の方へ】

避けたほうがよいもの

- 急がせる
- 出来るのにさせない
- 途中でやめさせる
- 無理強いする
- 無視して、放っておく

認知症の方が求めているもの

- その人らしさ
- 携わること
- 仲間に入りたい
- きずな
- 安定性